

# 学校・幼稚園における保護者健康教育活動の課題

## —保護者調査における自由記載の変化から—

川崎 裕美 津島ひろ江 弓場奈穂子 東 恵子  
荒谷美津子 岡野 佳子 見藤 孝二

### はじめに

糖尿病、高血圧、高脂血症といったこれまで「成人病」と呼ばれていた疾患は、生活習慣の影響を強く受けて発症すること、小児にも発症することなど実態の変化から、生活習慣病と呼ぶことになった経緯がある。中高年が、生活習慣病を予防あるいは悪化を防止するためには、生活習慣の変更が欠かせない。しかし、中高年齢になってから生活習慣を変更することは非常に難しく、強い意志と努力を要することである。このような視点からも、幼児期から健康に関心を持ち、基本的な生活習慣を身につけることは、子ども達が自分らしく能力を発揮できる人生を過ごすための基盤となると考えられる。幼稚園、小学校の指導要領でも、健康な心と体の育成、健康で安全な生活健康を自ら作り出す力の育成について目標が提示されている<sup>1,2)</sup>。また、生活習慣の育成と確立を目指した生涯を通じた健康教育を小児から推進していくことが、健康日本21でも期待されている<sup>3)</sup>。

子どもの生活習慣は、家庭での保護者の生活習慣や健康観に影響を受ける<sup>4)</sup>ため、幼稚園・学校と保護者が連携して進めることが、生活習慣の習得には重要である。その一歩として、保護者の健康教育は欠かせないと考えられる。保護者に対する活動は子育て支援として、地域保健において行われてきた。保護者に対する活動、特に生活習慣に関する健康教育は、妊娠、授乳期、幼児期において健康診断や健康相談の機会を捉えて行われてきた。しかしながら、保護者の生活習慣が子どもの生活習慣の習得に影響を与えることへの理解<sup>5)</sup>を得て、保護者の行動変容を促すことは非常に困難なことであった。行動変容を促すためには、意識の変容が重要であるにもかかわらず、保護者の意識を評価することが困難なため、意識の変容のための具体的方法や課題を明らかにしにくくしていると考えられた。

そこで、従来の幼稚園・学校での活動に加え、学部

と学校が協力した健康教育活動における保護者の意識変化を、活動前後における調査の自由記載から評価することを試みたので報告する。

### I 研究方法

#### 1. 調査対象と調査方法

平成16年3月および平成17年2月に三原附属幼稚園、小学校1年生から3年生を対象として調査を実施した。調査に際しては、保健学研究科看護開発科学講座倫理委員会の承認を得た。担任が調査への協力状況を判別できないように、調査票には、協力の意思確認の項目を設け、全員が調査票を提出するように依頼した。調査は、子どもの生活状況、および保護者の気持ち、健康を問うものである。

平成16年調査後から平成17年調査の間に、保護者への活動として、「目のお仕事」、「毎朝、うんこを出そう」、「砂糖の摂り方大丈夫?」、「姿勢を正して頭すっきり」というテーマの健康教育、および睡眠、食生活、習慣に関することの調査報告を兼ねた健康へのアドバイスを載せたお便りの発行を行った。

平成16年の調査は、活動前、平成17年の調査は、活動後と記した。

#### 2. 分析対象・方法

##### 1) 分析対象

調査協力者のうち自由記載がある母親を分析対象とした。

##### 2) 作業方法

自由記載を電子化(Excelへの入力)し、自由記載の分割には、Word Minerを用いた。入力されたテキスト型データを単語、句読点、記号に分割する「分かち書き」を行い、句読点、助詞、特殊記号を除いた。分析の見通しを良くするために、同じ種類の単語を一つの単語に置き換える操作を行った。ほしい、欲しい、いただきたい、頂けたらなどは「欲しい」、体、からだ、

身体は「体」に置き換えた。文章を分割し、置き換え・削除する操作を行った後に残ったものを「構成要素」と呼んだ。

### 3) 調査年別構成要素数の比較

構成要素の使用回数を「件」とし、1人が1回使用すると1件、2人によって3回使用されていれば3件とした。構成要素が5件以上のものを、活動前後で比較した。

### 4) 単語の文脈中での使い方の比較

文脈中における単語の使い方の比較を、活動前と活動後の記載において行った。Word Minerによる作業で得られた活動前の15の構成要素を基準とし、活動前後の自由記載原文から再度手作業で抽出した。手作業で抽出した単語は、個数として数え、その単語の文脈中での使われ方を前後の語列の状況によって比較した。

## II. 結果

### 1. 自由記載状況

活動前のアンケート用紙配布数は386枚、回収数は339枚、自由記載47枚、活動後は配布数384枚、回収数は323枚、自由記載34枚であった。

ひとりあたりの使用単語数は、活動前が17.6個、活動後が18.9個と増加していた。2件以上あった構成要素は、活動前157件、活動後は96件であった。自由記載を書く人数は減少しているが、ひとりの書く文章は増加していた。学年別自由記載回答者率は、活動前では、年長組が最も高く18.2%、活動後も活動前の年長組である1年生16.7%が最も高かった。

### 2. 5件以上記載された構成要素の活動前後の比較

構成要素の中で最も件数の多かったものは活動前後とも「子ども」であり、活動前は15人が25件、活動後は19人が32件記載していた。また、5件以上出現している構成要素を表1、表2に示した。

### 3. 文脈中での使われ方の比較

文脈中での使われ方の比較は、活動前の記載からWord Minerが抽出した構成要素の件数上位15位を対象とした。活動前に認められた単語における活動後の変化を表3に示した。単語における比較において、「体」など個数が大幅に増加したのは、「分ち書き」の作業では「体調」「体力」などが別々の構成要素として数えていたためである。

#### 1) 順位が上がった単語

##### (1)「健康」

「健康」は、順位は5位から2位へと上がった。活動前には12人によって15個出現し、活動後にも15人により22個出現と増加していた。活動前には、認められ

表1. 活動前に5件以上あった構成要素

構成要素	構成要素数 (件)	記載者数 (人)
子ども	25	15
良い	20	16
気	14	11
生活	14	9
健康	13	10
運動	12	9
身体	11	11
時間	10	8
食事	10	7
私	8	4
欲しい	7	7
機会	6	5
最近	6	6
自分	6	5
遅く	6	4
中	6	5
家族	5	4
活動	5	3
小学校	5	5
人	5	4
大切	5	5
必要	5	4

表2. 活動後に5件以上あった構成要素

構成要素	構成要素数 (件)	記載者数 (人)
子ども	27	16
健康	19	14
生活	11	9
自分	10	7
欲しい	9	10
中	9	7
時間	8	6
良い	8	7
大切	7	4
ストレス	6	3
多い	6	5
私	5	3
少し	5	5
食	5	5
心	5	4
親	5	3
人	5	3

なかった「健康教室」や「健康に関する調査」など、活動に関する語が活動後には5個が新たに使われていた。

#### (2)「生活」

「生活」は、順位は6位から5位へ変化した。活動前は9人が14個、活動後は9人が11個使用していた。活動前に多い使われ方は「生活習慣」の4個と「生活リズム」の4個であった。活動後は、活動前には1個し

表3. 活動前後における単語数の変化

構成要素の活動前の順位	活動前		活動後	
	単語	個数	単語	個数
1	子ども	29	子ども	30
7	体	28	健康	22
2	良い	20	良い	13
3	気	19	体	12
5	健康	15	生活	11
4	生活	14	自分	10
6	運動	13	欲しい	9
10	私	11	時間	8
8	時間	10	気	6
9	食事	10	私	6
11	欲しい	7	食事	3
12	機会	6	最近	3
13	最近	6	運動	1
14	自分	6	機会	-
15	遅く	6	遅く	-

か使われていない「食生活」の4個である。

(3)「時間」

「時間」の順位は、9位から8位に変化した。活動前は8人が10個、活動後には6人が8個使用した。内容は、親の時間に余裕がある、趣味の時間が持てるなど親の生活時間に関する事、子どもの睡眠時間、授業の時間、子どもが外遊びをする時間がないなど、子どもの生活時間に関する事で使用されていた。

(4)「欲しい」

「欲しい」は、活動前は7人が7個使用していたのに対し、活動後には9人が9個使用していた。また、表3に示したように、活動前の11位から7位に順位が上がった。文中での使い方を表4に示した。「資料を配布して欲しい」という内容は活動の前後とも2個ずつと変化はなかった。しかし、「～指導して欲しい」という使い方は、活動前は1個であるのに対し、活動後は4個と増加していた。「特に野菜の嫌いな2才の息子に対しては心をくださいます。学習の場でも野菜がすばらしい点などご指導していただけたら助かります」というケースのように、具体的に学校で指導して欲しいことを示しているものもあった。さらに「～な活動をして欲しい」という使い方をしてしているものが活動後には2個あり、「健康に成長していくために必要な知識を身につけられるような活動を増やしてほしいです」というケースでは、漠然としているものの健康に関する活動を依頼していた。

(5)「最近」

「最近」は順位が13位から12位へと上がったにもかかわらず、個数は活動前の6個から活動後の3個に減少していた。内容には、変化はなかった。

(6)「自分」

「自分」は、活動前の6個から活動後の10個と増加した。活動前は子どものことを指している使い方が1個に対し、活動後は6個に増加した。自分の健康は自

分で考えることのできる子どもになって欲しいという内容で使われているものが多く認められた。

2) 順位が下がった単語

(1)「体」

「体」は順位が2位から4位へと下がり、活動前は22人が28個使っていたが、活動後は9人が12個使用していた。体調、体力などは両年とも同じように使用されていた。活動前は「体を動かす」「体を鍛える」「体を作る」という使い方が5個、活動後は全く使用されていなかった。

(2)「気」

「気」は、活動前の4位から9位となった。活動前は19人が26個使用していた。活動後は6人が8個使用していた。文中での使い方を表5に示した。また、「気」の使い方について類似しているもの同士をまとめた比較を表6に示した。活動前は、「気がかり」、「気になる」が4個、子どもの健康について気になっていることがらが示されていた。「子どもに睡眠時間を十分とらさないといけないと気になりながら、どうしても夜が遅くなりがちです」というケースのように、子どもの健康上重要なことを理解していても実行できていないことが、気がかりとなっていた。「気が下がる」、「気分が落ち込む」、「やる気が起きない」という活動後は使用されていない、否定的な語は3個あり、「気分が落ち込み何もやる気が起きなくなり、出かける事もさけてしまいます」というケースのように、母親自身の内面について書かれているものもあった。活動後は、「元気」、「勇気」の使い方に、「私はなるべく子どもと接するようにしています。話をしていると私の方が勇気ややすらぎを感じ、元気をもらっているように思えます」というケースが示すような母親が子育てに対して持つ肯定的な感情が含まれていた。

(3)「運動」

「運動」は、順位が7位から13位へと下がり、活動前は11人が13個使用していた。活動後は1個しか使用されていなかった。活動前は13個中、8個は子どもに運動をして欲しいという内容であり、3個は母親自身が運動の必要性を感じている内容で、2個は健康には運動が必要であるという内容であった。活動後に記載されているものは、体育の授業をもっと有効的に活用して欲しいというものだった。

(4)「私」

「私」は活動前には6人が11個、活動後は4人が6個使用していた。内容は、「私たちが生活していく上で、健康に過ごすことはとても重要で大切なことです」というケースのように一般的に書いている活動前の2個、活動後の1個を除いては、母親自身や自分と子ど

もの関係について書かれていた。活動前は3人、活動後は1人と、同一の人が複数回使用していた。

(5) 「食事」

「食事」は、活動前は7人が10個、活動後は3人が3個使用していた。使われ方に変化は見られなかった。

3) 順位に変化がなかった単語

(1) 「子ども」

活動前は19人が29個使用、活動後は19人が30個使用していた。内容は、一般的な「子ども」として使われているものが活動前は17個、活動後は18個、自分の「子ども」として使われているものが活動前後ともに12個であった。その使われ方に変化がなかった。

(2) 「良い」

「良い」は活動前に15人が20個使用し、活動後は12人が13個使用していた。また、活動前では「子どもの健康に良い～を～してもらいたい」と学校への要望で

「良い」という単語を使用しているものが9個あったのに対し、活動後には3個に減少しており、活動前には要望を表す言葉でも、直接「欲しい」とは書かずに要望を訴えている内容に「良い」が使用していた。

4) 使用されなくなった単語

(1) 「機会」

「機会」は、活動前には6個使用されているが、活動後には使用されていない言葉である。その使われ方は、「～する機会があればよい」という意味で使われているものが4個で、学校側に健康教育を実施して欲しいという意見が示された。

(2) 「遅く」

「遅く」は活動前には6個使用されているが、活動後には使用されていない。子どもの寝る時刻や学校からの帰宅時刻、また親の帰りが遅くなることの影響など、生活習慣への関連について書かれていた。

表4. 「欲しい」の文脈中での使用状況

調査時期	サンプル	左の語列		右の語列
活動前	3	心配事 ある 必ず 体調 悪くなります 子どもに	欲しい	思います
	6	ゆとり 教育 言われる 中 子ども 自身 学習 以外 ゆとり 少ない ため 遊び 運動 ストレス 発散す る 時 少なくなっています もっと 子どもらし く 過ごせる ため ゆとり 教育 考えて	欲しい	もの です
	14	広大 附属 三原 さわやか 班 活動 学年 越えた 交流 でき 良い 思う この 一環 ガキ 大将 育成	欲しい	
	19	これ すれば ダイエット なる 体操 エアロビ 以 外 ある よう な の で それ 続けられる よう な 場 所 又 教室 作って	欲しい	サプリメント 高く つくし 家 では なかなか 実行 できない
	24	小学校 低学年 では まず 元気 体 作る 事 大切 だ 思います 最近 子供 ケンケンパ あがり できな い ニュース 聞きました そう いった 点 子ども たち 指導 して	欲しい	思います
	28	体 良い 資料 等 保健 だより 等 教えて	欲しい	いい 思います
	30	1日 必要 食事 等 参考 資料	欲しい	です
活動後	3	9 質問 について 子ども 心 家族 育てる 側 心 し だい だ 感じました 育てる 側 心 ケア 色々 指導 して	欲しい	です
	12	行けない 事 あります 子ども ために いい 資料 あれば 配布 して	欲しい	思います
	16	この よう な アンケート ある たび 毎日 食事 み なおして おります 特 野菜 嫌い 2才 息子 対し て 心 くださいます 学習 場 野菜 すばらしい 点 ご 指導 して	欲しい	助かります 本来 家庭 すべき です
	18	アンケート 調査 研究 終わらせ ず ぜ ひ 専門 家 立場 問題 提起 子ども たち 良い 方向 向く よう 積極的 声 あげ 指導 して	欲しい	思います
	19	その 時 栄養 士 さん 子ども 達 何 どの よう 食 べる 自分 自身体 良い かが わかる 子ども なっ	欲しい	おっしやって 頂きました まさに 食育 だな 感じました
	20	健康 体 大人 なる ために どの よう 事 すべき どんな 事 注意 すべき 等 知識 身につける 活動 行って	欲しい	です
	22	健康 成長 して いく ために 必要 知識 身に つけ られる よう な 活動 増や して	欲しい	です
	29	今 わが 子 問題 の が テレビ パソコン 自分 やめ られない 事 です 目 悪い 言っても なかなか 理 解 できない よう です そして 耳あか 嫌が っ て 取らせて くれ ない です 養護 実習 指導 して	欲しい	思いました
33	子供 為 なる 資料 あれば どんどん 配布 して	欲しい	思います	

表5. 「気」の文脈中での使用状況

調査時期	サンプル	左の語列		右の語列
	1		気	軽に相談できる場所があると良いと思います。
	2	私は現在3児の母親でこの子は真ん中です。第一子の時は まに(年一回位)	気	”が下がり何もしなくなる事がありました。第一子の時は子どもは自分の思い通りになるものと思っていたせいか思いどおりにならないとイライラしたりも…
	2	現在思いどおりにならないのが子どもで自分とはちがう人間 なのだ	気	がついてからは、体がだるくなったり、イライラしたりしなくなりました。
	2	そうすると子どもの	気	持ちをわかるようになり、子育てが楽しくなりました。
	3	心配事があると必ず体調も悪くなります。子どもには、神経 質にならず、明るく元	気	に過ごしてほしいと思います。
	4	今の子どもたちが大人になった時、果たして栄養のバランス のとれた食事をとっているのかとても不安に思います。基礎 体力のないのも	気	になります。
	5	自分が楽しいとか好きだと思える活動の中で、静(座ってす るような事)と動(スポーツetc)のバランスと、人と交わる 活動と独りで	気	ままにする活動の両方の時間がもたらベストだと思う。
	8	私は冬になると(具体的には11月頃~4月まで)	気	分が落ち込み何もやる気が起きなくなり、人に会うのも苦痛で出かける事もさけてしまいます。
	8	私は冬になると(具体的には11月頃~4月まで)気分が落ち 込み何もやる	気	が起きなくなり、人に会うのも苦痛で出かける事もさけてしまいます。
	8	何か良いアドバイスがあれば文書などで教えてもらいたいで す。5月~は今は考えられないくらい元	気	になり、積極的に向きになるのですが…。今現在が落ち込みのピークです。私だけののでしょうか!?
	14	少子化でガキ大将がいなくなった	気	がする。広大附属三原の「さわやか班」活動は、学年を越えた交流ができて良い
	16	家族の健康を司っているのは、母であり妻である私だと考 えている。そのために、	気	になっていることが、二つある。一つは、食の安全性。
	19	サプリメントは高くつくし、家ではなかなか実行できないの で、公共の場があれば長続きしそうな	気	がします。(例えばダイエット教室)
	24	小学校低学年では、まず元	気	な体を作る事が大切だと思います。
	26	大人になって又は子育てを始めて、初めて	気	づかされる生活習慣の大切さですが、もっと以前、
	26	成長の中で教育を通して又は合宿などの実体験を通して「規則 正しい生活は	気	持ちも良いし、体調もいい。ご飯も美味しい。勉強もはかどる。他の人のことをおもしろいやる余裕があったなど…。子どもらしいところで色々ともっと考察したり、みんなの意見を聞いたりする機会があれば将来子供に家庭の中での”生活”そのものへの関心を高め、幸福が身近にあることへの大きなヒントになったかとも思いました。
	27	どうしたらいいのでしょうか?	気	長に待つしか無いのでしょうか!?
	29	子ども達の健康は家族にとって一番大事な事で、元	気	で育ってくれる事を毎日望んでいます。
	31	健康に	気	をつけている事は特にありませんが、子どもたちに睡眠を充分にとる事とバランスのとれた食事という事は気にかけているつもりです。
	31	健康に気をつけている事は特にありませんが、子どもたちに 睡眠を充分にとる事とバランスのとれた食事という事は	気	にかけているつもりです。しかし、自分の事もどうしても二の次になってしまいがちです。
	33	集団生活をする上で、インフルエンザ等の予防接種を奨励す べきではないかと思う。感染する病	気	が流行したり、クラスに感染者がいる場合は保護者に知らせるべきだと思う。
	39	食事もすべて手作り。出来るだけ手をかけて、うす味、に	気	をつけてたり、汁物、魚、肉とバランスを考えたりしていま
	41	子どもが風邪をひきやすい体の為、食事こ	気	をつかったり、流行している時期はなるべく人混みをさけるようにしています。
	41	もちろん、普段から予防の為、手洗い・うがいを心掛け、睡 眠時間にも	気	をつけています。
	44	頭では、小さい子どもの外遊びが大事なことで、早寝、早起 きの習慣づけが重要な事と理解していますが、諸条件が揃わ ず、実行出来ずにいます。又、その事がとても	気	がかりになっています。母親として、出来る事はしたいと思うものの、時間の使い方が下手でそのイライラをつつらせてしまうこともあります。
	45	子どもに睡眠時間を十分とらさないといけない	気	になりながら、どうしても夜が遅くなりがちです。早寝、早起きの習慣づけが、一日の行動リズムに最も関わってくることだと思います。親として、生活リズムを整えるようコントロールしていきたいです。
	4	この質問の答えになっているかは分かりませんが…。私はな るべく子どもと接するようにしています。話をしていると私 の方が勇	気	ややすらぎを感じ、元気をもらっているように思います。子育てで本当に大変です。でもそれが私の生きがいになっているような気がします。
	4	話をしていると私の方が勇氣ややすらぎを感じ、元	気	をもらっているように思います。子育てで本当に大変です。
	4	でもそれが私の生きがいになっているような	気	がします。少し言い過ぎかもしれませんが…。
	11	母が肉体的にも精神的にも健康な方が子どもにとっては良い と思うので毎日元	気	でいられる様できる限り努力したい。
	14	睡眠が減ると、かぜなど病	気	をしやすいように感じている。
	17	住んでる場所によって健康状態が変わるような	気	がする。(周りが緑に囲まれた所と町の中のマンション)
	31	バス通学のせいで基礎体力がないような	気	もしますし学校でもっと体力作りをする時間があればと思います。
	34	4人の子供の親をしています。自分が元	気	でない子供に笑顔で接してやれない様に思います。この調査書を書かせてもらって自分がたいぶんつかれているなど実感しております。生活を見直すきっかけにさせてもらいま

活動前

活動後

表6. 「気」の使用方法の分類

	活動前	活動後
記載者数	19	6
単語数	26	8
気をつける、気にかける、気を使う	5	0
気づく、気がつく、気がする	4	3
勇氣、元氣	4	4
気になる、気がかり	4	0
気が下がる、気分が落ち込む、やる気が起きない	3	0
気ままに、気長に、気軽に	3	0
気持ち	2	0
病氣	1	1

### Ⅲ. 考察

#### 1. 自由記載状況の変化

ひとりあたりが使用する単語数は増加したことから、自由記載を行う母親は、健康に関して考えていることや感じていることをより多く伝えたいと思うようになったと考えられる。活動前の年長組は活動後の1年生になっても自由記載への回答者率が高いことから、この学年の母親には、健康への関心が高いものが多い可能性がある。学年により自由記載の回答者率は異なることが明らかとなった。このことから、学年によって健康への関心に違いがあり、学年という集団ごとの特性に応じた関わりが必要であると考えられる。

#### 2. 母親の関心の変化

「健康」の使われ方の結果から、「健康教室」や「健康に関する調査」という活動に関する語が活動後に新たに使用されたことにより、活動への母親の関心が示されたと考えられた。また、活動前は件数が上位であった「運動」や「体」が、活動後は使用されなくなったことから、活動前は運動の必要性について非常に関心が高かったが、活動後は健康教育やお便りで取り上げられた「栄養」や「睡眠」の方に関心が強く向けられたのではないかと考えられた。さらに、「生活」の使われ方において、活動前は子どもの生活習慣全般についてであったが、活動後は生活習慣の一つである食生活に特に関心が寄せられていた。健康教育やお便りで実施したことが、母親の心に特に印象付けられたといえる。これらのことから、活動がないときには各自が関心のあることがそれぞれ異なっているが、具体的なテーマを決めた保健活動を実施することで、母親の関心や考えが集約された可能性がある。

#### 3. 子育てに対する感じ方の変化

「気」の使われ方の結果から、活動前には気がかりなことがあり、否定的な感情を表す語に「気」を使用していたが、活動後には子育てによって肯定的な感情を持つことが出来たということに「気」を使用していたことが明らかとなった。このことから、健康教育やお便りを実施することによって、母親の気になっていることがらや否定的な感情を解消することが出来たの

ではないかと考えられる。また、子どもの健康上大切なことを健康教育で再確認できたこと、お便りに記載されたアンケート結果から他の家庭の状況を知ることができたこと、が自分の育児は間違っていないという安心感や自信を得ることにつながったとも考えられた。子育て上の問題に気づくための有用な不安を残しつつ、無用の不安を最小限にするには、母親自身の「大丈夫という感じ」の育成が重要である<sup>6)</sup>。3歳児健診以降、子どもの健康について関わりがなかった専門職との関わりが生じたことによって、子育ての専門的な知識と安心感により子育ての後押しをされているように感じ、さらには「気になっていること」を自分自身で問題解決できると感じる事ができたのだと考えられた。

#### 4. 学校への要望の伝え方の変化

「欲しい」の使われ方の結果から、具体的に指導して欲しいことを示し、健康に関する活動をさらに充実して欲しいという内容のものが活動後に増加していた。また、「良い」や「機会」の結果より、活動前では直接「欲しい」とは書かずに「良い」や「機会」を使用して要望を訴えていた。これらのことから、アンケート調査が学校外の機関である大学への伝達手段として母親に活用されるようになったといえる。同じアンケート調査が継続して行われることは、要求を表出する場として活用される可能性も示唆された。アンケートは無記名のため、学校に知られることなく確実に大学へ働きかけることができるという、アンケートの匿名性の影響も伺えた。「私」の使い方の結果は、要求するだけでなく、自分と子どもとの関わりや子育ての辛さなど、日常感じていることや自分ががんばっていることを誰かに聞いて欲しいという気持ちを示し、母親は自由記載欄を自分自身のことを表出する場として活用している可能性もあった。

#### 5. 今後の課題

##### 1) 保護者への健康教育活動のあり方

家庭と学校の両面から子どもの健康を考えるために、学校で健康教育を行うことの必要性を母親は感じていた。子どもの健康を考え、生活習慣を正していくためには、家庭で指導するだけでは不十分であり、学校も関わって欲しいと感じていた。家庭ではできないこと、学校で行う方が効果的なこと、を判断した上で、具体的な活動を提案することができる母親を増加させる可能性が考えられた。また、幼稚園や小学校でも保護者が自分の気持ちや家庭での努力を表出する場の必要性を示唆していた。幼稚園、小学校低学年の保護者への生活習慣に対する積極的なかわりにも、3歳まで地域で行われていたような、保護者を支える活動、

つまり、子どものために家庭で実行すべき役割の指導だけでなく、保護者が努力や苦勞を表出し認められる活動を含んでいる必要があると考えられた。しかし、学校への依頼の増加という視点からは、保護者が本来家庭で行うべき役割を学校に任せようとする危険性も推察された。幼稚園・学校における健康教育は、学校と家庭でそれぞれの役割を明確にし、連携する必要があると考えられた。

母親は、健康に関する提示されたことに関心を示し、さらに深く関わっていくことで気になっていることがらが解消され、学校への提案が可能になると考えられた。保護者への健康増進活動を効果的なものにするためには、短い期間でテーマを絞ること、テーマについての調査用紙によって気になっていることの明確化<sup>7)</sup>、が必要である。

保護者の健康増進に対する行動を継続させるためには、保護者の声を聴くことも重要である。テーマについて実行しているか等を問う自由記述式の質問用紙によって、保護者が考えを表出し、調査報告や健康教育の際に保護者の行動が肯定されることで、自己効力感が高められる効果が期待できる。生活習慣を改善するためには生活習慣変更後の継続性に対する自己効力感を養うことも重要<sup>8)</sup>であると考えられた。

## 2) 学校と地域連携のあり方

今回の研究は、学部・学校連携活動として、試行的に行ったものである。一般的には、本研究における大学の役割を地域との連携によって実施する必要がある。実際には、保健師がその役割を担うことが望ましいと考えられた。幼稚園・小学校に入学すると、保健師が関わることはほとんどない。学校保健と地域保健の連携について、連携の必要性を認識していない関係者が存在する<sup>9)</sup>、という問題も指摘されている。乳幼児から継続した保健師の関わりは、保護者からの信頼を得やすくするだけでなく、乳幼児期から学童期、児童・生徒期から成人にかけて、一貫性のある健康教育

を行える可能性を示唆している。行政の垣根を越えてお互いにフィードバックしていく健康教育システムの必要性も示されており<sup>10)</sup>、健康教育における一貫性のある支援の枠組みを整えていくことが今後の課題であると考えられた。

## 引用文献

- 1) 文部科学省. 幼稚園教育要領第2章 1998.
- 2) 文部科学省. 小学校学習指導要領第1章 1998.
- 3) 健康日本21企画検討会, 健康日本21計画策定検討会. 健康日本21(21世紀における国民健康づくり運動について)報告書. 財団法人健康・体力づくり事業財団 2000.
- 4) 中村伸枝, 石川紀子, 武田淳子 他. 学童の親がとらえた子どもの生活習慣と生活習慣が改善できない理由. 千葉大学看護学部紀要 2001; 23: 15-22.
- 5) 澁谷敬三, 国崎英雄: 新学校保健実務必携《第六次改訂版》. 東京: 第一法規出版株式会社 2002.
- 6) 川崎裕美, 海原康孝, 小坂忍 他. 母親の育児不安と家族機能に対する感じ方との関連性の検討. 小児保健研究 2004; 63: 667-673.
- 7) 忠津佐和代, 武田則昭, 實成文彦. 保健習慣と保健に関する意識・知識・態度・行動等の状況—職域健診後の要指導対象者において—. 保健の科学 2001; 43: 569-576.
- 8) 宗像恒次. 自己カウンセリングシート法による食行動変容—新たな栄養教育の試み. 臨床栄養 2002; 101: 817-823.
- 9) 山田七重, 中村和彦, 山縣然太郎. 学校保健と地域保健との連携の現状と諸問題. 山梨医大紀要 1999; 16: 6-10.
- 10) 林敬. 保健所がめざす管内市町村と養護教諭の連携. 保健婦雑誌 1999; 55: 493-497.